

400字詰原稿用紙 50枚書き下ろし

平成十七年七月一日改題加筆修正版

リメイク版 50枚書き下ろし
武州・千鳥が淵異聞

たなか踏基

異聞とは、人が余り知らない話、普通いわれる内容と異なる珍しい話のことである。武蔵の国(東京都、埼玉県全域、神奈川県の一部)、武州には古来そうした異聞が沢山伝わってきたに違いない。これは、今から十数年前、年号が改まった頃の、現代の武州に伝わる男女の変った語である。武蔵国府跡は、文字通り今の東京国分寺にある。

春の彼岸が過ぎ、櫻の便りがちらほら聞かれる三月中旬から四月上旬までの季節は、東京人にとって特別の季節となる。東京が、別れと出逢い、終わりと始まり、入学と卒業、就職と転勤、上京と旅立ちを演出する人生の大舞台となるからである。三月上旬、南の櫻前線が北上し始めると、上野寛永寺、新宿御苑、墨田公園、武蔵国分寺跡、三鷹市の旧多摩川浄水堤や井の頭公園等の東京の櫻の名所が、老若男女でだんだんと賑わってくる。氣象学的には、櫻の種類を染井吉野に限定し、その平均開花日が同じ地点を結ぶ線を櫻前線と呼ぶのだそうだが……。

飯島明子は、この季節になると毎年必ず、埼玉県浦和の自宅から、高崎線で上野に出る。地下鉄銀座線(東西線を乗継ぎ、九段下で降りて一人で見物に出掛けた。明子は、靖国神社の櫻も好きだが、特に九段坂上をおりて行くと桃色の空の下に広がる、戦没者墓苑のある千鳥が淵、お堀端の櫻が想い出深く好きなのである。緑道沿い八百メートルに樹齢五十年以上の染井吉野が七十九本、皇居石垣には三百本に近い山櫻が咲く。光景はまさに春爛漫である。お堀の水面に張り出す櫻の樹木は、まるで演技を終えた舞姫が身体を投げ出して床に臥す様に似ている。八重櫻の匂い立つような妖艶さ、平安時代の幽玄な趣と異なり、むしろ山櫻の清楚で優しい隠れた女の情念を通わせる。とりわけ飯島明子が好きなのは、曇天や小雨の日の、千鳥が淵の水面に散る櫻である。まるで喜びも悲しみも一緒にして、ただひたすら散りゆく花卉のはかなさに、自分の心を投影できるからかもしれない。この時季、櫻の魔力にとり憑かれて、櫻前線を追い駆けるカメラ片手の旅人も多いが、飯島明子はそれ程の櫻フリークではない。唯ここは他の場所と違って、カラオケも莫

座の宴会も屋台も御法度なので、ひたすら佇んで、一人静かに櫻を愛でながら、物思いに耽る格好の場所だからでもあった。

浦和は、平成十三年五月に、大宮、与野市と合併し、「さいたま市」となるまでは、昭和九年の市制施行以来、埼玉県の県庁所在地、また首都東京から二十キロの至便性が高かったため、住宅地・文京都市として発展した。「鎌倉文士に浦和画家」なる言葉がある。鎌倉に文人が東京から移り住んだのに対し、浦和に画家が移住した文化人の町を誇る名残の言葉であるうか。平安時代、弘法大師開祖の玉蔵院という真言宗の古刹があり、木の地蔵菩薩像が祀つてある。元々浦和の起源は、この地蔵尊を拝みに人々が集まってきた町という説がある。江戸天保年間には、本陣、脇本陣等の施設を有し、中山道三番目の小さな宿駅であった。浦和宿に、六歳市という定期市がたつてたようだが、往時を偲ぶ遺跡は残り残つておらず、本陣跡名残の碑が仲町公園にある。一方陸の要所上尾宿は、古くは中山道六十九次五番目、つまり日本橋起点で、板橋、蕨、浦和、大宮と続く次の宿駅であった。東京国立博物館所蔵「中山道分間延絵図」によれば、鎌倉大神宮(今の氷川神社)の正面に本陣、両側と向かいに脇本陣三軒があったとされている。江戸から、信州飯山出身

の雲室上人を、鍬大神宮境内の聚正義塾しゅうせいじつに迎え、有為の若者の勉学の場に供したといふ。原市は、戦国時代から三と八の日に市がたつ古い市場町として、また平方は、江戸までの荒川船運、河川の要所として昔から発展している。明治十六年に高崎線が開通した当時は、今では信じられないことだが、大宮に駅が無かったのである。停車場は、浦和、上尾、鴻巣、熊谷の四駅のみであった。明治初期四十五宿村の村が後に合併し、昭和三十年上尾町に、昭和三十三年に市制施行により上尾市が誕生している。

自分より年下の男を恋してしまった女が、健全で常識的な理性を働かせることでその男を諦められたら、幸福だったかもしれない。幸福というよりも、無難で安全であったと言いつ直すべきかもしれないが・・・しかしそういう訳にはいかなかった。若い男には、不安と混乱の危険性を含んだ未知なる魅力、そのくせ母親の幻影を引き摺る未成長な中途半端な魅力がある。その男が多感であればあるほど、その魅力は輝いて見える。内部に潜在するものが、表面に湧き上がってキラキラする輝きとなって見える。例えば、力を込めて身体ごとぶつかってきたドアには、実は鍵が掛かっておらず、はずみを喰らって部屋の中に飛び込んで

で赤面している無様さを観れば、思わず頭を抱えて胸で温めてやりたくなるような・・・

い知らされた少女時代の劇的な変化、初潮と共に始まっていたものらしい。明子は両親が持余し気味の勝気な女性であった。

美容師の西山幸吉は、そんな感情を飯島明子に起こさせていた。一目観て恋をした。飯島明子は、西山幸吉の性格や生活を知らないうちに、一目の邂逅で捕まってしまった。軽薄で安易な一目惚れと軽蔑されても仕方がない。それまでの慎重な明子の生活振りからは、そんな未来を推測させる兆候は微塵もなかったからだ。でも軽率な第一印象偏重の傾向は、不思議な女の特長技能と人は非難するけれど、一般的に女には第一印象、いわゆる一瞬の目の閃きに込められた感情を読み取る才能にかけては、先天的に男より優れたものを持っているのであるまいか。それでいて、自分の直感力に自信が持てずに絶えず疑って懼り、しまいに打算的な意識に染まって仕舞うのも、経済的自立性を欠く悲しい女の性なのであるうか。それが女の健全な理性の働きというものなのであるうか。もし、そうだとしたなら、健全な理性の働きにこそ唾を吐き掛けたい。飯島明子はそういう女性である。

飯島明子の生意気さは、男との対立の上で消費されてきたような気がする。それは恐らくあの何も知らない幼児の中性の存在から、晴天の霹靂のように襲ってきた身体の変化、自分が無理やり雌であることを思いついた。親が持余し気味の勝気な女性であった。飯島明子は、アンネ・フランクのように自分が女であること、神秘的な機能を有する生物の雌であること、交接すれば受胎し、やがて子を産める誇りとは無縁だった。唯々、それは煩わしい生理現象にすぎなかった。この時期の少女がそうであるように、明子は黙って大人しく可愛い女の子でいた。そして自分の観察眼と直観力を磨き、こっそりと大人の女の所作を盗むことに専念していた。母が明子を、ぼんやりだとか、気がきかないとか、考え無しとかいう小言を、耳の中に無造作に押し込んで受け流しながら、母が自分に隠そうとしている事実のみを追いつ求めた。次第にその対象を自分の母から母の友人、つまり成熟女性一般に広げていった。そうした隠された事実に対する好奇心は、明子に様々な知識を与えてくれたばかりでなく、この時期徹底的に自分を曝らけ出さないことが、隠された事実を得る大切なコツであると気付いた。

飯島明子が、最も興味を示すことを人から気付かれないように、意識させないよう

に、自分の視線を有効に動かす術を身に付けた。顔の表情を意識して変える試み、表情の制御へと努力した。悲しい時に平静で、

むしろ楽しく嬉しそうな演技さえした。そればかりでなく、わざと悲しい気持ちを誇張して内面に引起しておいて、そこから勢い良く飛び出して、喜びの表情を浮かべる実験を、鏡の前で何回も何回も繰り返した。明子が、手鏡に向かっている姿を母に見られたとしても、この時期のナルシストな少女にありがちな事だと見逃して呉れるという安心感があった。実験は極めて容易に毎日行われ、そして次第に習熟していった。

「この頃、鏡ばかりみているのね。」
「だって、年頃ですもの。」

それで母に対しても、母の友人に対しても充分だった。応える時に、一寸照れた様子を浮かべて、ペロりと舌を出し同時に首をすくめてみせれば、一層効果があった。手鏡の中の自分の表情を、すっかり覚え込んでから今度は鏡を伏せ、今迄の自分の表情を想いだしては、意識的にそれを変化させる。結果が期待の表情であることを、実験の成果として鏡の中に見出した時は、我ながらぞくぞくとする快感を覚えた。

飯島明子は、埼玉大学教育学部を卒業後、東京上野の文部省司書養成所に一年間通い、図書館司書としての専門教育を受けていた。暫く、東京市ヶ谷と飯田橋の略中程にある、H私大の図書館司書として勤務していたが、二年後、地方公務員試験を受け、H私大を

止めて、上尾市の図書館職員に採用された。両親監視という束縛を我慢さえすれば、浦和の自宅から通えたことと、東京通勤に逆行するので電車もすいていて都合が良かった。その間、明子は少女時代の顔の表情を、制御する実験も継続していた。今度は鏡の中の実験だけではなく、実際の場面応用、即ち、東京や埼玉の人間との付き合い方を訓練していたといってもよい。その癖、他の若い女と同様、恋とその快樂の謎を解く努力は、人並み以上に熱心だった。

結婚というものに対する考え方は、理性的に処理していた。だから母からのお見合い話にも乗らなかつた。両親の勧める学歴や背が高く生活力のある男の見合い話、いわゆる三高は結婚条件として第一義でなかつたからである。自分の直感を満たす男であれば、例えそれが瞬間的であつたとしても構わないと思つた。唯あるのは男と女の情感であり、必ずしも生活を実在させていくような愛だとか恋でなくとも良いと考えていた。お互いの精神的責めの中に、

飯島明子は、人間の欲望や意志が普遍的なもので、またそうでなくてはならないと考えてもいなかつた。若い内にお互いの生殖機能を働かせて、子供を設ける行為は、子

孫繁栄のために必要であり、決して性衝動を否定していた訳ではない。別に、中高年過ぎて年中愚痴をこぼし合い口喧嘩して、糧と情性のために繋がっている忍従の夫婦関係に幻滅していたわけでもない。誰かが誰かを好きになつて、独占したくなり、その欲望を結婚という形式で正当化するのには確かに人間の知恵である。でも何故結婚後にやってきた恋愛が、浮気や不倫として酷評されねばならないのか、結婚をもちした恋愛よりも、結婚後にやってきた恋愛の方がはるかに人間にとって意味があることだつてあるに違いない。結婚が原則として解消できぬものとして、取り決めた人間の知恵は正しかつたのであるつか・・・と。

東京に引続き、地元埼玉での実験を日夜繰り返している内に、何時の頃からか、そうした意固地な杞憂が明子の胸の中に渦巻くようになっていた。社会通念上の因習や成約を疑い始めた頃の明子は、上尾図書館の司書の生活にもすっかり慣れ、もう直ぐ二十五歳に手が届きそうになっていた。

飯島明子は、昭和三十八年創立文京区の演劇研究団体、文学者・評論家の故福田恒存が創立の現代演劇協会の活動に関心があつた。協会は、本科・専攻科クラスの俳優養成所を有し、本駒込の「三百人劇場」で発表会を毎年開催していた。ちなみに劇場の

名前は、座席数三百二席に由来している。俳優の訓練は、少女の時から継続してきた明子の実験にとても似ていて、図書館業務のレファレンスサービス訓練、その応用にも役立つと思つたからである。

飯島明子は、その頃劇団Kの仲間と一緒に浦和のダンスパブにいた。演劇訓練には、ダンス・体操の他、男女共に擬闘の訓練すらあつた。演劇には、しばしば喧嘩や格闘の場面があるからである。明子は、仲間の特定の誰かに興味を抱いていたからではない。特に社交ダンスは、身体のムーブメントを養う上で必須課題であるからである。

正確に言えば、四人で一緒にダンスを習う過程で確かに惹かれる男もいたのだが・・・

演劇の理論ではAに叶う者がいなかった。ダンスが上手く演技力ではBが優れており、イケ面で女にもてるC、演出をやるCに対しては誰もが尊敬の念を抱いたが、もはや明子を引き釣り廻す程の魅力を無くしていた。男達は何れも、女がそういつた能力や知識に惚れ込むものだと思つていたので見え見えで厭だつたからだ。他の女達ならいざ知れず、この飯島明子に限っては違つて・・・彼等に対し明子は何処か張合う気持ちで接していたのかも知れない。

演劇とダンスは、飯島明子が何時からともなく感じ始めた上尾図書館の「虚」を癒

す役目を果してきたようだ。生活の「嘘」は図書館の仕事帰りも、自宅の部屋に戻つてからも毎日憑いてきた。寂寥感といつても良い。人間らしく充実した時間を持ちたいという感情が、情性に流され誇張された心の間隙をぬつて、突如として突き上げてくると、なす術なく逡巡してしまう。

例えば、何処の図書館とて例外無かつたであろうが、上尾図書館も開館と同時に、定年後の男性シニヤと受験勉強の学生によつて席が占拠された。彼等は、本や資料を読んだり調べたりするのではなく、唯椅子と机と冷暖房を使いこらして来た。受験参考書を持たむ学生は自宅勉強より、図書館の方が能率良かった。男性シニヤは、先ず午前中、取替え引換え新聞・雑誌に目を通し、飽きると昼寝をし日がな一日時間を潰して帰宅した。為に、図書館の本を使いたい人には殆ど席がない。何の為に本の専門家の司書がいるのか。上尾図書館の児童図書閲覧室に集まる小煩い幼児連れの主婦、御喋り好きで厚かましく書架を徘徊する中高年のオバタリアン、そんな人種に接すると、昔習つた図書館の本質的機能が奇麗事と思えてとても空しくなる。

曰く、情報拠点として人と情報を結びつける、住民の読書施設としての役割、読書を勧める働き掛け、地域の知的資産保存・

活用、生涯学習の支援、地域住民の合意形成等々である。始まつた電子図書館の動きに対応できない事務職棒上がりの官吏、通俗的な非常勤アルバイトの学生や主婦、これが一体本当に上尾図書館業務を支えて生きる種族であろうか。何等思想もなく、唯自分を消費することに忙しく毎日を情性で送っている。加えて外部のお小言が時々聞こえてくる。図書館職員は役人風や教育者風を吹かすなど、一方では投書がくる度に、態度が悪い、無愛想で冷たい、偉そうだと批判された。

こんなに大勢の人間がいるのに、心を許せる友人が一人もできないといった感じである。旧来のものとは別の何かを自分等が創りだせて、また創りだして行く責務を放棄してしまつた頭でつかちの図書館職員。

なら、矛先を自分に向けた時の失望感、焦燥感・・・そういった感情の追い討ちに居た堪れなくなつていたので、確かに演劇仲間と近づき、ダンスを習得出来たのは一つの変化であつた。

階段を下りた広い浦和のダンスパブのホールの中に、大きな四角い柱があつて、カッブルはそれを避けるように左回りで踊つていた。何時もはレコードで踊るのだが、週の決まつた日には、バンドが入る日があつ

るような顔だった。西山幸吉は苦しそうに、上着のジッパ―を押し開くと、明子達に割り込んできて、カウンターの縁にかろうじて手を突いた。

「何おー 飲みつけない! こんなもの何時も飲んでゐるワイ!」

「坊や 酔っ払ったなー 飲みつけない 酒をのんで・・・」

「何おー 飲みつけない! こんなもの何時も飲んでゐるワイ!」

明らかに虚勢を張った少年の台詞だった。

「ほらー 水でも飲めよ!」

ダンス得意なBの滑らせたコップの水を西山幸吉は一気に飲み干し、肩で大きく息をついた。肩で息をしながら、西山幸吉は飯島明子を発見すると、今度は明子の顔をまじまじと酔眼で見詰めた。手にしていたコップをカウンターの置き、そのまま身体をよるめかせてべたんと床にしゃがみ込んだ。手から離れたコップが、はずみで床に落ちて砕けた。床に倒れこもつとする刹那、明子の膝を掴んで自分の身体を支え、そのまま明子の膝に頭を押し付けてきた。イケ面のCがおまえを助け起しに掛かった。

「ノビチャってー、ツイスト・ボーイも だらしがない! ほら掴まれ!」

どぎつい化粧のダンスパブの年増女が、一人慌ててとんできた。先程のシルバのパー トナーではなかった。

「ダメー お客さんに迷惑かけてー」

「どうもすみません! スカートの汚れま せんでしたか?」

西山幸吉は、明子の膝に頭を押し当てたまま、嫌々するようにして応じない。その女がおまえの背後から抱き起こそうとし、男達もそれに加勢する。西山幸吉は、そう

されればされるほど、駄々子のように、明子の膝を挟みこむようにしがみ付いてくる。

「困るわーあ!」

明子はその時、西山幸吉が泣いているのに気付いた。幸吉の涙が、スカートの布地に沁みて内腿を湿らせた。それは、ひたひたと身内に溢れて満ちてくるような、いい知れない唐突な潮だった。

少女時代の実験で、自分の表情を制御できたから、司書よりも役者に向いていると思ってきた。でも明子は二年間付き合った、演劇仲間とは次第に疎遠になった。明子がいもう演劇を止めたいと仄めかした時、「君みたいに才能がある人が、止めるのは惜しい。」等と仲間はお弁チャラをいった。

翳りのある甘いマスクで、風貌も体軀も少年のように華奢きゃしゃだった西山幸吉が、美容師つまり女性を顧客とするヘアデザイナーだったとはとても信じられなかった。だって、出会いが余りにも子供じみていたし、

業界の常識を欠く行動だったからだ。女客相手のサービスマスターの美容師が、例え酔っ払ったとしても、見ず知らずの女の膝に頭を押し付けて泣くだろうか。でも西山幸吉はそれを平気でやった。だからこそ、抱擁する明子の腕の中で幸吉はぬくぬくと温まっておられたのだ。

上尾原市生まれの西山幸吉は、野球で知られた私立高校の美術科を専攻して卒業した。父は原市の代書稼業、祖父は原市に今も残る神社を造る宮大工であった、卒業後、母親の強い勧めもあり、直ぐ日銭が稼げる道、美的センスを要求される美容師を志した。当時、他の仲間は大学に進学するか、今流行の情報系専門学校に通っていた。そうした仲間達を尻目に、一人で浦和の美容専門学校に二年間通い、美容師試験に一発で合格した。高砂町の美容院に、見習いで入り今に至っている。オーナ店長が、親切に幸吉に下宿を紹介してくれた。

秋始め、その日は土砂降りの雨だった。傘を持たなかった明子は、びしょ濡れになって幸吉の汚い浦和の下宿に飛び込んでいた。西山幸吉は驚いた顔で明子を迎え、明子はバスタオルを借りて髪の毛を拭いた。

「風邪ひくぜ。」

西山幸吉は突然、足元にしゃがみ込むと

立ったまま片方ずつ明子の足を上げさせて、靴下を脱がせに掛かった。西山幸吉は、明子の素足を両手で擦りながらそのままじつと抱えた。

「温めてやらあ。」

「あつっ・・・ありがと。」

西山幸吉の手の温もりで、明子の冷えた爪先から、身体中に血潮が廻る思いがした。

「もういいの。ありがと。」

西山幸吉の頭に手をやって、身を起させようとすると、幸吉は立ち上りざま明子の上体を抱き絞めに掛かった。幸吉を退けようと、突っ張った二本の腕が哀しかった。

涙がでるほど口惜しかった。あの時は、幸吉が酔っていたから多少許せたが、いまは素面であるだけに許せなかった。

西山幸吉は、男の力で明子を不意に抱いたのだ。幸吉の前では、ふっとしたはずみで精神の緊張を外したことに油断があった。本当は外したということではなく、不意でもなかったのかもしれない。いや、始めから、自分を支えるものは無かった。その点では油断でもなんでもなく、隠された感情の底に、抱かれないという気持ちがあったからだと思う。突っ張った二本の腕は、自分の感情すらも騙す実験の所作だったのであるまいか。感じた口惜しさは、逆の演技の結果だったに違いない。

「ずいぶん そっけないんだなあ。」

明子は、幸吉を軽くいなすように肩から幸吉の腕を外すと、平静を装った。幸吉は反応しない明子に物足りない風だった。

「ちよつと悪かったかな。ゴメン！」

「そうよ。」

明子は嗜めるような調子でいった直ぐそばから、幸吉が明子の実験に巧みに丸めこまれて行くのが歯痒かった。明子の表情の中に、心を覗かせない別の演技があつたらだ。実際は、幸吉に抱締められたことが、どんなに明子を動揺させていたことか。幸吉にはそれが伝わっていない。幸吉が、更に一步でくれば、明子にその用意があつたことを幸吉は知るまい。幸吉の下宿に飛び込んだ時から、その用意をして待っていたことを幸吉は知るまい。

男と女が愛していれば、絆を大切にしたいと思えば、結婚という制度を無視して良いと思っていた。商品化された女の性を縛る世間の常識に、体当たりしてでも逃げなくてはいけな思っていた。第一、女の性は男を釣上げるための商品であつて良いのか。商品化された女の性に吸い寄せられてくる男達のために、女の媚態は用意されているのか。男の性的欲望に合わせて、外の礼儀を保護色にして、カメレオンのように女の媚態は千変万化する。女は結婚以

外にいかなる性的欲望も許されず、それに息を殺して耐えるというのか。結婚制度が何と奇異な思いつきだと思えてくる。愛だとか、好きだという感情は、全く自発的な直覚力なのに、男の掌中恒久的に握られる一種の決意であるとは。非人間的な家庭の具体物、性の奴隷を兼ねた番人になれというのか。明子はとてもなれそうにない。

明子が、自宅の両親を説得して誰にも干渉されないで借りた浦和の2DKのマンションに、西山幸吉は何時からか転がりこんできて、明子は幸吉と同棲生活を始めた。幸吉はそこから高砂町美容院に通った。

「そんな青一才と同棲してどうする気なの？ふしだらだよ。おまえは！まさか結婚したい等と馬鹿な事はいわないよね。」

嗅ぎつけた、母と叔母の第一声がそれだった。母は、単独では明子を説得できないと知っていたから、実家の叔母に援軍を求め二人で来た。駆けつけた母は、頑固な明子に対して、罵ったり、涙を流して哀願したりした。叔母も交互に、合いの手を入れて諭すようなお説教を垂れた。母や叔母だから仕方ないと思つて我慢して聞いていた。説得しきれないと判ると、叔母は渋々一人実家に帰ったが、早くその美容師と別れなさいと忠告の手紙がきた。手切れ金の積り

か、何がしかの金が送金されてきた。世間体を考える、叔母という存在の不思議さを感じた。明子は、誰の忠告も陰口もこたえなかった。西山幸吉の生活は、「虚」を感じさせない意外性の連続だったからだ。

西山幸吉は、先天的に女を喜ばせるコツを体得しているかのようだった。それと何処か漠とした危険な不安感が共存していて、それは女を不幸にしそうな因子に思えた。

そのくせ女の扱い方は上手く、誰か別の女が手をとって教えたかのようだった。通常的美容師のイメージとはまるで違っていた。普通の店で修行をして、店から独立して温厚な店長となれば、結婚したがる女が寄ってくる。幸吉の場合は、美容院を持つても女に家庭生活の憧憬を与えるような能力をまるで持ち合わせていなかった。あの時の一目の邂逅、明子は確かに幸吉に惹かれて捕まってしまった。自分が変わっていく、

どんどん変わっていく。極端に嫌いな部類の女にさせられるような。幸吉のために何でもして上げたい。献身的ではおらしいタイプの人に成り下がるようで不安だった。

西山幸吉には、女に貢がせるヒモの素質があるようにも思えた。幸吉の言葉に「嘘」を感じるにも拘らず、今までと違った羨いの無いこの身内の充実感は何なのか。一体、幸吉は明子を翻弄する気なのか。

「ああ このコールテンの背広、女の人からもらったんだ。」

「あの時のダンスパブのひと？」

「……」

そう無造作に言い放つて明子の顔を見た。

幸吉の言葉は明子を狼狽させたのだが、別に気にならないのよと平静な態度をみせたので、幸吉はあっさりと続ける。

「三十歳の女の人だよ！」

その言葉は、更に酷な追い討ちをかけた。さすがにどぎまぎと狼狽する自分が悲しかった。幸吉は意地悪く笑っている。美容師にありがちな女性のパトロン、明子は幸吉の背中にびったりとくっついて別々の女、その女が飲み屋のママなのか、若いのか、人妻なのか、未亡人なのか・・・と思いを寄せたが、その質問をさせない強引な言葉の押し売りがあった。

「叔母さんだよ 女には違いないだろう。」

そういつて面白そうに笑った。明子は自分の内部の厭らしい格気を意識したが、すつきりしたわけではなかった。この場合、男に惚れてしまうと、女の敵は男でなくなり、女になるとい言葉は正に至言だった。

明子と寝た後にも何気なく聞いてみた。

「どうして知っていたの？」

「知っていたって？」

「おかしいわ。」

「何が・・・」

「何がって？ 何もかもが」

「誰か教えてくれる人がいたんでしょ。」

「そんな事位。」

「そんな事位・・・何よ。あたりまえだというの？」

「本能的なものさ、別に教えられたわけじゃないさ。」

西山幸吉は、こんな風にとぼけてみせたが納得できなかった。過去に決定的な役割を果たした女の影を嗅ぎ取ったからだ。幸吉を独占したいという、そんな弱い感情は女の何なんだろう。

西山幸吉は、一体何を考えているのか女の明子には時々分からなくなることがある。何処へ行くのか、時に明子の引出しからお金を持ち出して、店を休み忽然と雲隠れしてしまう。前触れも無く旅行にでるのは何故なのか？行く先も告げず、帰ってきても尋ねられるまでは行ったことすら話さない。その旅行は無計画極まりない。時として、そんなでもない所から電話をよこす。能登半島の禄剛崎辺りをほつつき歩き、青森の連れ込み宿に二日もごろごろしていたようなこともあった。その度に、高砂町の美容院に詫びを入れるのが明子の役目となった。

こうして突飛な行動に翻弄されながら、

二ヶ月経過したある日、明子を更に驚かす西山幸吉の意外な側面を発見した。唐突に小説を書き出したからだ。本当は美容師なんかでなく、小説家になりたいのだと真顔で明子にいう。母親は幸吉が手に職をつけることを強く望み、男の子が詩歌・小説・芸能に被れるのを極端に嫌ったという。でも隠れて中学時代から書いてきたのだという。父親は、原市で代書屋(行政書士)のよ

「もう寝なさいよ。」

うな仕事だった。自分は父親の血を引いたのだと幸吉はいった。小説の舞台を上尾にして、お祭りの夜を描きたいといって、明子に文化財調査報告書の資料を欲しがった。上尾には二つの無形民俗文化財として平方

を上へやっただけで文字が見えてくるんだ。でもこうするともう見えない。」

「どろいんきよ」と藤波の「餅つき踊り」があったので、図書館から借り出すと、幸吉に小説の参考資料として貸してあげた。

そんな風にして執筆された西山幸吉の小説「武州の祭り」が、地方新聞の文芸欄に、

西山幸吉は立上ると、真夜中の喚声とともに原稿用紙の束を天井めがけて放り上げた。五十枚程の原稿用紙が天井に届くことなく、ばらばらになって落ちた。明子は、隣の部屋で幸吉の姿を蒲団の中から眺めていた。二、三枚の原稿用紙が枕元に飛んできた。幸吉は、部屋に散らかした用紙を丹念に拾い始め、大儀そうに鼻息を荒げ、狭い四畳半を歩き廻る。鼻風邪を引いているらしく、鼻をぐすぐす言わせている。用紙を集めながら、幸吉は明子の枕元までやつ

第三回の懸賞小説入選作品として掲載された。それは、七月と正月と季節が夫々異なる、二つの上尾の行事の歴史感を踏まえ、赤裸々な恋愛小説に仕上がっていた。幸吉の何処にこうした構成力と創造力が秘められていたのかと想うほど、上尾図書館の資料が見事に活かされていたのは、本好きの明子も吃驚したくらいであった。

「もう、いいかげんで寝たら。」

話は、平方の無形民俗文化財「どろいんきよ」の奇祭と、藤波の「餅つき踊り」に絡む、男女が織成すどろどろとした愛憎劇で、導入は祭りの前夜の幻想から入る荒削りな私小説であった。その筋立ての中に、

幸吉が私の寢床に入ってきたら、優しく抱きしめて慰めてやろうと思っていた。とりわけ髪の毛を解くのが、幸吉は好きだったからもし、幸吉が要求するなら、寝る前に止めた髪の毛のピンを一つ一つ外させてもやろう。おまえが女の髪に触れる職業を選んだ理由が判る気がした。

決定的な役割を果たした女の存在、背後霊のように幸吉に纏わり付く、不幸な幸吉の母親の亡霊を垣間見たような気がした。

「ほら こうすると、原稿用紙の表面が光って書いた文字が消えて見得るんだ。」

同時に未知の力で明子は引っ張られ、幸吉

首を竦め、下の方から透かすようにその面を眺めたまま、どうしても観てみると明子に強要してきかない。

「ほら ほら 来てごらん、光って面白いよ。この角度が重要なのだ。一寸首

光って書いた文字が消えて見得るんだ。」

小説を書くという緻密な能力を有する幸吉に、明子は改めて惚れ直す思いがした。

「ほら ほら 来てごらん、光って面白いよ。この角度が重要なのだ。一寸首

同時に未知の力で明子は引っ張られ、幸吉

首を竦め、下の方から透かすようにその面を眺めたまま、どうしても観てみると明子に強要してきかない。

同時に未知の力で明子は引っ張られ、幸吉

首を竦め、下の方から透かすようにその面を眺めたまま、どうしても観てみると明子に強要してきかない。

同時に未知の力で明子は引っ張られ、幸吉

首を竦め、下の方から透かすようにその面を眺めたまま、どうしても観てみると明子に強要してきかない。

同時に未知の力で明子は引っ張られ、幸吉

と一緒にどこまでも墮ちていくような気さへした。幸吉の態度は益々横着になり、時には靴下さえも履かせてくれとばかりに、足を明子の方へ投げ出したりした。幼児のようににはしゃいだかと思うと、次には憂鬱な顔になって、頑固親父のような顔でそっぽを向くような気分のムラを見せた。幸吉にとつて、明子は必要な人間であると同時に、いやそれ以上に明子は幸吉が必要だった。幸吉は女の生存の意義をはつきりと感じさせていたからだ。今更ながら自分の直感力の正しさを認識した。明子では成し得ないことを見事にやり遂げる能力を幸吉は備えていそうであるが、未消化の食物を反芻できないもどかしさもあった。

西山幸吉は、小説のなかでも生活の場において、常に女を求めていた。もつとはつきりいえば、幸吉は常に女の性器を求めていた。女の性器なら誰のものでも良かったわけではない。おそらく擦れ枯らしの娼婦達の性器に、睨まれたらそれこそ幸吉の一人物は縮み上がってしまったにちがいない。幸吉は常に母親のように優しく抱かれることばかり求めていたからだ。母親の幻影を常に求め、生まれ出た母親の性器と、同種の性器を持っている女を捜し求めていた。もし明子と同じ性器をもつ女が、他にもいることが判ればどうなっていただろうか。

「わたしから、離れたらダメよ。離れたらいけないのよ。」
「私によつて目を覚まされたのよ。それを忘れないでね。」

寝物語に何回も聞かせた明子の台詞に、幸吉は何時もう無言だった。その代わり、幸吉はぐるーつと寝返りを打って首を伸ばすと、明子のネグリジエの胸を割り、暖かい匂いの中にしゃにむに唇を押し当ててきた。この場合、理性を制御する明子の実験は何の意味も持たない。唯、あるのは男と女の存在、幸吉と明子なのだ。「交わらざれば万物起こらず」の喩えの如くであった。

このふわふわとしたこの感じは一体何だろう。身体が次第に澄んで、やがて透明人間になるみたいだ。そこにさわさわと音をたてて風が吹き抜けていくみたい。恋をすること、女は男より卑屈なものとして自己を意識しなければならぬとしたら、西山幸吉が明子を自由自在に操るとしたら、明子は恋の舞台から即刻降りなければならなかったのだ。幸吉の動作や表情に心を配ろうと、全身の神経を総動員している明子は何という変わりようだろう。長年の実験により習熟した演技の手法をすっかり忘れ、まぐあいの快楽をすがり求める余り、つまらない自堕落な女に成り下がっていく自分が何としても情けない。下肢の虚脱した熱つ

ぼさと、ふやけたような乳房から股へ感じる筋肉の感覚が、頭の芯の何処かでまだ疼いている。耳朶や乳房を幸吉が激しく噛む痛みが余韻を引いたように蘇ってくる。それは渴望と陶酔が渾然一体となって、卑しい淫乱の咎が明子を苛んでいるかのようだった。夢心地だけれど夢ではなく、おぞましい女の業が夢のなかからそのまま這い上がって、怪しく変身して鬼と化すかのようだった。

西山幸吉は、もうその後で何時ものように寢息を立てて眠りに入っていく。明子はそつと置いた手で幸吉の髪を撫でていた。

地方新聞の入選を切欠にして、都内のある同人誌の発行人から同人として参加要請があり、幸吉の周りに小説を書く仲間が集まるようになった。それだけでなく、「小説を書く美容師」の噂が口コミで広がり、高砂町の美容院を訪れる女客が増え、少なからず店は繁盛した。客の髪をカットする手捌きは丁寧であっても、ニヒルな影さえ漂わせ無口で無愛想、しかも少年のように華奢な西山幸吉が、何故有閑マダム連にモデルのか分からないと店長は良く言った。でも、幸吉は今まで以上に張り切つて、そう幾分有頂天になつて美容師の仕事の傍ら、小説を何本か同人誌に発表した。しかし明子が幸吉の才能に失望し始めた

のは、何時頃からだったのであらうか。でも、西山幸吉に対する失望には繋がらなかった。明子が幸吉を抱取ってやらないで、他の誰にそれができようと思っただけだからだ。女の明子でさえも、気付かないような見事な女の心理描写をしたかと思うと、およそ荒い文体の杜撰な構成で尻きりトンボの作品を書いたりした。荒削りであることに未完成の魅力を感じさせるのだが、幸吉の場合、小説を書くには絶望的な欠陥を持っているような気がした。明子は、幸吉の作品に無責任な評をなした地方新聞の二人の作家を恨みに思う。《二十歳前後で小説を書く、兎角無理をするもので、その年齢で自らを見詰めることができる人間は才能のある人だと思ふ。その点でこの「武州の祭り」を買う。》《「武州の祭り」はわり

に好きだった。初めのうちは、言葉づかいの点でゴタゴタしているが、女性との祭りの夜の幻想の中をかきわけながら進んでいくにつれリズムになり、女性のところへ着く。できれば、始めの幻想味に戻って終わってもらいたかった。もっと磨きだせば、新しいものがでてくると思ふ。》

西山幸吉の欠陥、幸吉の気紛れの原因をはつきりと指摘するのは難しいが、何か幸吉自身ではとうてい打ち破れない壁のようなものがあった、それが幸吉を後方に引き戻す作用を果していたのではあるまいか。幸吉はその壁をはつきり理解できずに、自分の才能に不安がっていたのではあるまいか。それは、つまり美容師という職業で、

自分の運命を嘆息する自己虐待にも繋がっていたようだった。もっと自分に対する思いやりと優しい気持ちがあったらよかったのに……と今でも明子は残念に思う。

四月に入って直ぐ、飯島明子は西山幸吉と連立って、浦和玉蔵院境内の五分咲きの枝垂れ桜の夜桜見物をした。その後、明子の知らないダンスパブに二人で立ち寄った。西山幸吉は、其処に以前から入り浸りだっていたようだが、明子の場合には気分転換を兼ねたダンスは二ヶ月振りだった。黒いドアを開けて中に入れば、赤いカーペットを敷き詰めた階段が下方にのび、ホール奥の正面のボックスからアルトサクスの音が二人を襲ってきた。

ブルースを踊りながら足慣らしを終え、と、アップテンポのチャチャでたちまち何時ものパブの客に同化した。幸吉は得意のジルバを踊るとき、明子を反転後転やたらと廻してきた。傍らの歯を剥き出して踊る黒人カッパルに対抗するような勢いで、明子も嬌声を上げながら早い回転に耐えた。廻る度にスカート裾の手で押さえながら、片目をつぶり近くに寄ってくる周りの常連客とも挨拶を交わした。

曲目がルンバやサンバに変わると、周りに馴染みの若者達が寄り集まり、別の場所に西山幸吉を連れていった。幸吉の美容師容学校仲間との付き合いが、その後の遊びでも継続していたからだ。ラテンを踊る時の幸吉は、仲間が一目置くほど際立ち、エネ

ルギツシユなヒーローだった。西山幸吉は若い仲間とラテンを、飯島明子は常連客とモダンを、夫々分かれて閉店まで踊り続けた。明子の右脳が興奮し、身体の昂揚後の疲労感で心地良かった。午前〇時を回る頃まで、そのホールにいただろうか。ラストダンスのワルツこそ、明子は幸吉と一緒に踊ったが、その晩は何故か自然に別れ別れになった。その日幸吉は、朝まで仲間と何処かにしげ込んで帰ってこなかった。昔の美容師容の学校仲間、お馴染みの遊び仲間にも困まれて、小説を書くことにそろそろ限界を感じ始めていた失意の自分から、開放された晩だったのかもしれない。

『美容師未明の交通事故死！』
 厳然たる事実が今此処にある。

若い美容師三人が、暴走車に轢かれたことは、翌日の地方新聞が三面記事で報じた。場所は、浦和駅西口ロータリーのバス停付近、一人は病院で死亡、二人は重軽傷で助かったという記事であった。死亡した一人は、コールテンの背広が自動車のパンパーに引っ掛けられ、五十メートルの道路を引き摺られながら、アスファルトに頭がコッソコッソとぶち当たる音を聞いたという。たまたま未明の、バイクに乗った新聞配達員の初老の男は、そう証言した。通報で救急車が駆け付け、西山幸吉と二人の重軽傷者と共に病院に運んだ。事故が警察に知らされたが、撥ねた車は逃走した。警察はひき逃げ車を直ぐに手配したが、未だに犯人は捕まっていない

と・。幸吉の自殺疑念を抱きながら駆け付けた飯島明子は、浦和中央病院の救急外来で、幸吉の母親と始めて遭遇した。母親も、前から薄々明子の存在に気付いていたようだったが、お互い顔を合せるのはこの時が最初で最後となった。女の意地のぶつかり合いが原因だった。泣き崩れていた母親は、明子を観ると開口一番、きつと聞き直ったように言葉を投げた。

「何処の何方様ですか？お帰り下さい！」
「ただのお友達です。」

明子も実験の顔で冷静に応えた。母親の顔に、幸吉の事故死は、この女の存在に原因があったという怨嗟の想いが、はつきり観て取れた。明子は、小説の中で背後霊のように幸吉に纏わり付く、母親の亡霊を眼前に見た思いがした。ふと自分の顔も、幸吉の母親の顔に似ていると気付きながら、飯島明子は失意の母親に向って、相手を見下すような実験の啖呵を切った。

「お母様！幸吉君が、結局こうなったのは、最後まで乳離れできなかったからですよ。これは貴女の責任です！」

櫻の散る晩春、飯島明子は自分が妊娠していることに気付いた。西山幸吉は明子の懐妊を知らずに逝ってしまったので、幸吉との実験的生活は、あっけなく半年で終わった。始め、母に知られぬ内に、明子は人工中絶で子を墮そうと決めていた。掻爬手術で、宿命的な肉厚の袋から西山幸吉との子を掻き出せば、全て西山幸吉との絆を断ち切れると思っただからだ。現在の婦人科医学

の条件なら、墮胎は楽な手術のはずだ。その腕のたつ専門医のアドレスを熱心に調べてみた。そこでは内密のうちに、西山幸吉の命は文字どおり掻きだされてしまっただろう。その病院では、間違いなく大切に扱ってもらえるし、やがて自分でも惚れ惚れするような健康な身体を、上尾の図書館職員の誰にも知られずに、椅子の上に取り戻すことが可能だという自信もあった。

ところが、西山幸吉が飯島明子に与えてくれた命を種として残すこと、つまり幸吉の子を産む決心を固めたのは、一人で九段下の千鳥が淵の櫻を観に行った時のことである。この千鳥が淵は、初めて明子が東京に勤務したH私大から、靖国通りにできれば歩いても十五分でいかれる距離にあつたから、御馴染の土地勘が働く場所であつた。曇天の薄暮の中、ただひたすら櫻の花びらが皇居のお堀の水面に舞い落ちる光景を半ば痴れ者のように放心して眺めていた。暮れ残る光に揺れながら、まるで雪のように花弁は舞い散っていた。

お堀の水に浮かぶ櫻の花弁が、水面の風に吹き寄せられてはまた一点に流れ集まる様を眺める内に何故か、飯島明子は涙が頬を伝わって溢れ出た。悲しいからではなく、切ないからでもなく、散るがゆえに激しく燃えて華やぐ男と女の情愛、とりわけ西山幸吉との出逢いの想い出、幸吉の約半年の実験のような生活が無意識に脳裏をかすめたからであつたに違いない。

《全て終わった・・・》

ふと、学生時代に好きだった西行法師の歌が口をついて出た。狂わしい程に櫻を愛し、櫻とともに生きた放浪の歌人、西行法師を羨む気持ちに底にあつたかもしれない。

《ねがはくは花の下にて春死なむ
そのきさらぎの望月の頃》

千鳥が淵に咲く、染井吉野や山櫻の木々の一本一本が、平安の昔から続く武州の女の人生を暗示しているような気がした。花の寿命は短くて、開花期間は四、十日位だと聞いたことを思い出したからである。昔、母の軽蔑していった言葉でいえば、父無し子を産むこと、つまりシングルマザーとなり、西山幸吉の子供と一緒に暮らす実験をまた一から始めるのが、飯島明子の定めであるような気がしたからである。溢れた涙は、千鳥が淵の櫻の女神が、饑にくれた、種の存続という女の天職、懐妊という事実を成就しようという子になった、お祝いの涙であつたのかもしれない。

飯島明子は、千鳥が淵の散る櫻をぼんやりと眺めながら、これが華奢で少年のような体躯の西山幸吉との実験の終わりであり、また自分の母親との新たな実験の始まりなのだと思いを決めていた。

参考文献

- 「上尾百年史」上尾百年史編纂委員会編
- 「これからの図書館」大串夏身著 青弓社
- 「図書館員として何ができるのか」西田博志著 教育資料出版会
- 「上尾市文化財調査報告」上尾市教育委員会編
- 第4集「平方のぞろいんき」第5集「藤波の餅つき踊り」

了